

『敵対者、聴衆、構成員、そして共同体』 エドワード・W・サイード

2005年6月22日

小椋なつき・石原桃子(サマーピーチ班)

はじめに

いつでも私たちの回りには「他者」がいる。そしてその「他者」が生活に大きな影響をあたえている。本文献ではその「他者」を構成している敵対者、聴衆、構成員についての共同体のあり方を深く追求している。それと同時に私たちのあり方にも言及している。今回の発表では、そのお互いの現状とあり方について詳しくみていくことにする。

1. 批評家達

<批評家たちのための批評家達>

- ・ 読者なしのテキストはありえない→読者の存在の肯定
- ・ 解釈は本質的に私的、内面化された事件である→解釈=知識人の仕事
- ・ より強い権力、堅実な地位を求め自己閉鎖的→わたしたちは混じる事はできない
- ・ 批評家達はお互いの本を読み合う→読者の確保
- この現状に対しての疑問符→ニュー・ニュークリティシズムとニュークリティシズムの二つの学派は読者とテキストの間の壁を壊そうとし、専門家達だけで話し合うことは文学との対話を妨げているとし、読者の広い共同体を作ろうとした。

しかし… 大衆社会内部の権威を競いあうだけで、洗練した技術は多様化し、構成員を拡大することの関心は失われ、結果的に専門家達だけで読み合うこととなってしまった。

2. 「領野」とその内部を構成しているもの

<領野・テリトリー>

- ・ 領野の規範→ひとがなにかを熟練するためには、規則、その領野の権威を受け入れなければいけない
- ・ 分離された領野の正統派の増殖

<「構成員」と「敵対者」>

- ・ 独特の構成員や解釈の共同体を作り出す。
ex.伝記の流行、自伝的文学での「自己—ファッション化」

これらは世俗的歴史の乱雑な領土を原子化し、私的なものにし、物象化する。

人文科学者たちにとっての構成員

→別の人文科学者、学生、政府と法人勢力、メディアの従業員など(固定的)

敵対者＝大部分は非エキスパート、非専門家として外に排除される人々 ≠構成員に同意しない人々

3. 「再現＝表象」という観念

人文科学の特別な使命→日常世界の事柄への不干渉を再現＝表象すること

公的な再現＝表象の批判

- ・ 専門家とその顧客との小さなグループに譲り渡す閉じられた社会的プロセスを開く
- ・ 文学の聴衆は閉じられたサークルでなく社会の中で生活している人間の共同体である
- ・ 社会的現実を神秘的な仕方ではなく世俗的な仕方考えるべき

<二つの具体的な課題>

●視覚的な能力の利用

それらの能力は基本的に無媒介的であり、「客観的」であり、非歴史的である。

⇒写真のもう一つの利用

ex.スーザン・メイザラス『ニカラグア』

●他者の歴史の回復

他者＝「インサイダー」によって作られた規範の「外側」に留まるもの

- ・ 解釈からその政治への移行⇌何もしないことから何かをすることへの移行
- ・ 専門化の気風の快樂が心地よいのは、われわれみんなを適材適所に置くからだ、ということを信じるべきでない

考察

いまのわたしたちが生きている世界でも、情報や知識は完全に世俗化されていない。インターネットが普及したことで、さらに多様で錯綜した情報世界ができた。一見、人々がすぐに求めている情報にたどり着けるようになったように見えるが、そこで得た情報についての是非を下すことは至難の業となってしまっている。また、情報が多く存在することが逆に隠蔽もしやすい環境を生み出しているといえる。

サイドは写真の利用が情報の世俗化に有用であると述べているが、今やその写真の信憑性も問われているのではないか。人間の技術が進歩していくあまり、その技術が逆に弊害を生んでいるのは皮肉である。情報の世俗化に技術を利用することは大いに有用であると思うが、そこには「限界」を感じてしまう。

先に述べたような情報というものが完全に混乱している状態で、わたしたちはその情報を世俗化することについてどう考えていけばいいのか。そして専門家の気質をどう破壊していけばいいのか、そもそもそれを破壊したいという気があるのだろうか。その問題を抱える一方、このまま専門家たちの間とわたしたちの間の溝が大きくなってはいけないという危機感もある。まさに今、知識や情報を専門家達だけにまかせてはおけないという強い意志表示がわたしたちに問われている時なのである。

<参考文献>

ハル・フォスター『反美学ーポストモダンの諸相』1987 勁草書房